

上原 美術館 通信

No.

7

編集・発行 公益財団法人上原美術館
2019年9月27日発行(季刊年4回発行)
公益財団法人 上原美術館
〒413-0715 静岡県下田市宇土金341
Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp



伊豆という言葉は輝く海、険しい山、温泉、歴史、文学など、さまざまなイメージを思い起こさせます。川端康成は伊豆が「詩の国」、「歴史の縮図」、「南国の模型」、「海山のあらゆる風景の画廊」であると述べて、その魅力を語っています。

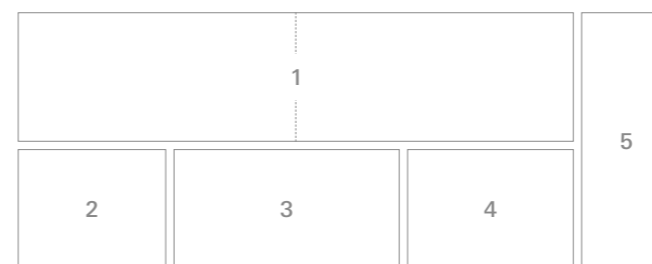
伊豆半島の中央に位置する伊豆市は、平成16(2004)年に修善寺町、土肥町、天城湯ヶ島町、中伊豆町が合併して誕生しました。天城山や修善寺温泉などの豊かな自然のみならず、歴史や文化に富むこの地は、近代になって日本画家も多く来訪するようになります。その縁で伊豆市には多くの日本画の名作が残されました。今回、伊豆市との共同企画展として、上原美術館の仏教館と近代館の両館で、伊豆市が所蔵する名品の数々をご紹介します。

明治41(1908)年、奈良で古画を学ぶ安田靫彦は胸を病んで

帰京を余儀なくされます。そのとき、旅館を営む友人の相原^{もくほう}沐芳の勧めにより伊豆・修善寺で静養することになりました。静養中に研究を重ねて自らの画風を見出した靫彦は、その後もたびたびこの地を訪ね、画家仲間の今村紫紅や小林古径、前田青邨、速水御舟^{さいすいごふね}らも集まるようになりました。

明治末、横山大観も夫人や自らの療養のため修善寺を訪れ、沐芳と交流するようになります。昭和5(1930)年には大観らの渡欧壮行会が修善寺で開かれるなど、その繋がりは長く続きました。

こうした交流から伊豆は名画が生まれる場所となり、多くの作品が残されることになりました。本展では伊豆市が所蔵する絵画を通じて、伊豆の魅力、そして日本画の魅力をご紹介します。(土森)



1 今村紫紅《枇杷叭叭鳥》大正元(1912)年頃

安田靫彦の盟友である今村紫紅。彼も靫彦の紹介で相原沐芳と親しくなり、修善寺を訪れました。日本画の将来を背負う画家として期待されながら35歳で亡くなった紫紅が、晩年に描いた大作です。

2 川端龍子《湯浴(湯治)》昭和2(1927)年

温泉地・修善寺に別荘を構え、修善寺の檀家でもあった龍子は伊豆をテーマに多くの作品を残しています。龍子の娘がモデルとなった本作は修善寺の新井旅館で着想したといわれています。

3 横山大観《神州第一峰》昭和5(1930)年

昭和5(1930)年、大観はローマの日本美術展開催のために渡欧。その直前、日本美術院同人により壮行会が修善寺の新井旅館で行われました。この覇気に満ちた霊峰・富士は、そのときに描かれたものといわれています。

4 安田靫彦《鴨川夜情》昭和9(1934)年頃

田能村竹田と頼山陽、青木木米が鴨川で夕涼みをする様子が描かれています。本作は靫彦から相原沐芳に贈られた作品。穏やかな夜の情景はどこか修善寺温泉の風情にも似ているのかもしれない。

5 速水御舟《手向》大正2(1913)年

まだ浩然と名乗っていた19歳の御舟による作品。装飾的に描かれた蕨の葉や卒塔婆が琳派の影響を思わせます。この絵は描かれて間もなく、御舟から相原沐芳に贈られました。



伊豆市修善寺地区は、伊豆中央部を南北に貫流する狩野川の支流、桂川流域に開けた風光明媚な温泉地。伝説によると、遠く平安の昔、弘法大師が訪れたとされ、当地には弘法大師にまつわる様々な物語が伝えられています。

『今昔物語集』によると、若き弘法大師は、当地の山寺(後の修禅寺)に滞在しましたが、当時この地には魔物が多く、修行を妨げたのだそうです。そこで弘法大師が「大般若経・魔事品」という経典の一節を虚空に書いたところ、経文が光を放ち、魔は退散。その後、この地からは魔が絶えて、仏法が繁栄する霊地となったといいます。大師が魔を降したと伝える場所には現在、修禅寺の奥の院にあたる正覚院が建ち、境内には魔を封じ込めたと伝える「驅籠窟」という洞窟もあります。

修禅寺の門前を流れる桂川の中州にある独鈷の湯は、弘法大師が密教法具の独鈷杵で川床の岩盤を割り、湧出させたと言われています。この湯は、様々な病をいやす霊泉とされ、その景観も相まって名所となりました。なお、厳寒の時期、桂川で病気の父の体を洗う孝行息子の姿に打たれた大師が独鈷の湯を湧出させたという話が有名ですが、管見の限り、この話は江戸以前の古い書物に見ることができないため、比較的新しい物語かもしれません。ところで、桂川にはもう一つ伝説があります。岩盤を割った際、弘法大師は勢い余って独鈷杵を桂川に落としてしまいました。仕方なく大師は川に入りましたが、川底に棲むカワナ(先端がとがった巻貝)を踏んでケガをします。そこで大師は、同じように負傷する者が出ないようにと、カワナノ殻の先端を岩で欠いてしまったので、以来桂川の

カワナは先端が必ず欠けているようになったというのです。カワナノ殻はわずかに水に含まれる酸に溶けやすく、実は桂川に限らず、カワナノ多くは殻の先端が欠けているものなのですが、面白く、また微笑ましい物語だと思えます。

微笑ましいといえば、鳴き声がやかましいクツワムシにまつわる話があります。弘法大師はこの地で、一切経(仏教の全てのお経)を読破しようという願を起しましたが、あまりにも庭のクツワムシがうるさく鳴くため、「看経(お経を読むこと)の妨げになるから、瓜生野(修善寺の隣の地区)へ行け」と命じ、それ以来、修禅寺周辺にクツワムシはいなくなったというのです。ちなみにその後の大師、半ばまで経典を読み終えたところで、急用ができ、行を中断せざるを得なくなったといい、そのため大師が看経のために滞在した寺を半経寺と名付けたとのこと。残念ながら半経寺は近年廃寺となりましたが、弘法大師自作と伝えられる半経寺本尊・薬師如来坐像は修禅寺に移され、現存しています。

弘法大師伝説をご紹介しますながら申し訳ないのですが、実は、弘法大師こと空海が伊豆に来た可能性は、学問的には残念ながらほとんどないとされています。伊豆の大師伝説は、空海の弟子や空海を崇敬する数多くの密教僧の活躍が、弘法大師の姿に重ねられて語られたものなのかもしれません。しかし弘法大師に対する人々の

篤い信仰は、修禅寺を伊豆における大師信仰の一つの中心とし、仏教文化を開花させました。さらに大師への思いは、温泉や美しい景観と相まって、当地に多くの人々を誘いました。この地は歴史の舞台となり、訪れた文人墨客は文を綴り、あるいは作品をこの地に残しています。

今秋の上原美術館の企画展「伊豆をめぐる名画」では、伊豆市所蔵の日本画を展示しますが、それらの多くは伝説の舞台である修善寺地区ゆかりのもので、弘法大師を描いた作品もあります。また展示品の一つ、修禅寺所蔵の独鈷杵は修禅寺近隣で出土したもので、弘法大師の時代より若干時代が降る時期のものですが、貴重な平安時代の密教法具であり、当地に古く密教が栄えていたことを物語る貴重な文化財です。是非ご来館下さい。



石井林誓《弘法大師》明治41(1908)年 伊豆市蔵 『伊豆をめぐる名画』展 前期に出品

上原美術館ではこの秋、伊豆市との共同企画展として、『伊豆をめぐる名画—横山大観、安田靫彦を中心に—』を開催します。豊かな自然と歴史、文化に育まれた伊豆市には多くの日本画家が訪れ、名画の数々がこの地に残されました。そのキーパーソンの一人が修善寺温泉にある新井旅館の三代目当主・相原沐芳(1875-1945年、本名・寛太郎)です。

明治8(1875)年に沼津の原家に生まれた沐芳は、東京に出て学業を修めます。一方で日本画家の石井鼎湖に絵を学ぶなど芸術に造詣が深く、多くの画家と親しく交流しました。中でも生涯を通じての友となったのが9歳年下の日本画家・安田靫彦(1884-1978年)です。

靫彦は13歳の頃、展覧会で横山大観や菱田春草、下村観山の絵を見て感激し、画家を志します。その技量は高く、若くして注目される存在となります。画塾の仲間とともに勉強するため「紫紅会」を結成、看板を出して研究会を開いていたところ、ある若者が乗り込んできました。自分の名前をなぜ使っているのかと問うのは若き画家・今村紫紅でした。話をしてみると意気投合し、以来、二人は生涯の友となりました。研究会は「紅児会」と改め、二人は制作に邁進します。その作品は岡倉天心や横山大観など先人にも高く評価され、23歳のときに天心らが組織した日本美術学院の給付により奈良で2年間の勉強を始めました。しかし、元来体が丈夫でない靫彦は1年も経たずに体調を崩し帰京することになります。

失意の靫彦を訪ねて、修善寺で静養することを勧めたのが相原沐芳でした。静養する間、殆ど制作が出来なかった靫彦にとって、芸術への理解が



安田靫彦《萬古天風》昭和5(1930)年 伊豆市蔵 『伊豆をめぐる名画』展 前期に出品

深く、古典への素養もあった沐芳の存在は大きかったといえます。靫彦は修善寺で描いた作品に、自らの想いを文章で添えています。「余をして孤独の境を出で父母の懐に入るの想有らしむ 淹留すること数歳病漸く退く 時に筆硯に親しむを得るに至る実に盟台夫妻の賜也」。(著者意訳:「[沐芳夫妻の歓待は]自分が孤独の境地から出て、両親の懐に入るようだ。逗留して数年で病が退き、筆や硯に親しめるようになったのは実に沐芳夫妻のお陰だ」)。いかに沐芳が靫彦にとって大切な存在だったかが分かる文章です(展覧会小冊子『伊豆市所蔵近代日本画コレクション展 大観・靫彦・龍子らと修善寺』[静岡市美術館、2016年]に所収)。

靫彦は徐々に健康を取り戻し、数ヶ月後には沼津に居を構え、近くに今村紫紅夫妻も移ってきます。彼らは度々、新井旅館を訪ねて沐芳と交流し、制作を重ねました。沐芳のもとには「紅児会」の小林古径、前田青邨、速水御舟らも集うようになります。明治45(1912)年靫彦はコレクター原三溪の援助を受け、

小田原に引っ越しますが、沐芳との交流は生涯続きます。大正8(1919)年、35歳で結婚した靫彦の媒酌人をつとめたのは沐芳夫妻でした。靫彦は年始の贈り物として、毎年干支に因んだ絵を沐芳に送り続けました。

昭和5(1925)年、ローマで開催される美術展のために横山大観らが渡欧する際、日本美術院の壮行会が開かれたのも新井旅館でした。そこには安田靫彦など主要メンバーが集まりました。本展出品の大観《神州第一峰》や靫彦《萬古天風》はそのときに描かれたものと考えられます。この二つの富士は伊豆市が日本美術の展開において重要な土地であったことを教えてくれます。同時に大自然の描写には伊豆半島のなりたちと文化の発展という大きな時の流れに想いを馳せることができます。

昭和20(1945)年、沐芳が亡くなったとき、靫彦は「恩人であり、友人であり、悪友だ」と述べました。美しい友情とともに伊豆市に残された日本画の数々は、今も多くの人々をひきつけています。

これからのイベント

学芸員によるギャラリートーク(作品解説)

開催中の展覧会の内容について、展示室で学芸員が作品を見ながらお話しします。

日時 会期中の毎月第3土曜日 11:00～/14:00～ 所要時間約40分

会場 上原美術館展示室

参加方法 当日、仏教館にお集まりください。 ※要入館券、予約不要

講演会開催

演題 「インドの仏像の成立」

講師 石上善應氏(大正大学名誉教授)

日時 2019年11月24日(日)13:30～15:00

会場 下田セントラルホテル 2F 大会議場(下田市相玉133-1)

定員 200名

参加方法 ご予約、もしくは当日お越しください(予約優先)。ご予約される方は
①お名前 ②郵便番号とご住所 ③お電話番号 ④参加人数(5名様まで)を
明記の上、郵便はがき、もしくはEメール(info@uehara-museum.or.jp)
にてお申込みください。



活動報告

ミニ講座開催

「お薬師さま入門」2019年7月31日、9月7日 当館会議室

上原コレクション名品選1に展示されている薬師如来坐像にちなみ、当館の田島整主任学芸員が、薬師如来はどのような仏で信仰されてきたか、また伊豆に伝わった薬師如来の名像など、画像を交えてご紹介しました。両日ともに多くの方にご参加いただき、講座後にゆっくり作品をご覧になっていました。

社会体験研修

2019年8月1日～2日

今年度、2名の中堅教諭等資質向上研修の受け入れを行いました。この研修では、美術館のさまざまな業務を体験していただきますが、今回は主に学芸業務を中心に行いました。実際に掛軸や絵画作品の調書を取る作業をし、最後にそれぞれ企画展を考えていただきました。

学芸員実習

2019年8月12日～17日

大学で学芸員資格を取得する学生を対象に、学芸員実習の受け入れを行いました。今年は1名の受け入れとなり、6日間で掛軸や仏像、額の取り扱いや、美術館の機能などをお話し、さまざまな作業や課題に取り組んでいただきました。最終日には実習の最後に企画展の立案、発表を行いました。6日間でお話したことを良く吸収し、伝えたいことが分かる内容の立案となり、学芸員からは内容に対する助言などを行って、実習を終了しました。

調査活動

2019年6月14日、7月12日、7月26日 河津町内寺院5ヶ寺

2019年6月17日 三島市内寺院2ヶ寺

引き続き、河津町教育委員会との調査協力で、河津町内の寺院5ヶ寺で調査を行いました。今回の調査では、江戸時代の年銘がある涅槃図が二幅確認できました。また三島市では、みしまのお寺めぐりの会、各寺院協力のもと、涅槃図や仏像の調査を行いました。今後も調査活動を継続してまいります。



夏休みワークショップの開催

当館では夏休み期間に、こども向けのワークショップを開催しました。

◎出張ワークショップ・はじめての日本画

2019年7月31日 伊豆の国市茅野っこひろば

伊豆の国市主催の「伊豆の国市こども教室 あいキッズ」にて、出張ワークショップ『はじめての日本画』を実施しました。講師には、当館日本画教室の牧野伸英先生をお迎えして、小学生を対象に、日本画やその画材について解説を行い、実際に作品を描きました。天然の石などから作られた岩絵具を、^{にかわ}膠と水で混ぜて色を塗る日本画独特の描き方に、はじめは戸惑う子もいましたが、最後には積極的に絵を描いて楽しく作品を仕上げていました。



◎デッサンワークショップ

2019年8月5日～8日 当館会議室

当館のデッサン・水彩画教室講師の小野憲一先生をお招きして、今年も小～高校生を対象とした夏のデッサンワークショップを開催しました。この講座は2013年の夏から始まり、今年で7年目となります。今年は7名の参加者があり、4日間じっくりとデッサンの基本に取り組みました。参加した子供たちは、集中力が途切れることもなく、熱心に鉛筆を走らせて作品を描いていました。



◎はじめての日本画体験

2019年8月12日 当館会議室

当館の日本画教室講師、牧野伸英先生をお招きして、日本画体験講座を実施しました。参加した小中学生は、普段触れる機会のない本格的な日本画の画材を使って、寸松庵すんしやうあんという小さな色紙に絵を描いていきました。子供たちにとって、学校で使い慣れたチューブ絵具とは違い、膠と水を岩絵具に指で混ぜて描く日本画の画材は新鮮だったようです。慣れない岩絵具に挑戦しながら、楽しくじっくりと日本画制作に取り組み、個性豊かな作品が出来上がりました。



◎親子で色遊び、透明水彩で

2019年8月21日 当館会議室

今年の冬期に開催してご好評をいただいた親子一緒に楽しむワークショップを、夏休みに開催しました。こちらは定員がすぐに埋まってしまふほど人気のワークショップで、今回は8組22名の参加者がありました。講師の小野憲一先生が最初に基本になる赤・青・黄の色水の使い方をお話し、それぞれ水を足して色の濃度を変えたものを作って塗ったり、色水を混ぜてグラデーションを描いたり、親子で一緒に絵筆を持って、会話を楽しみながら制作を行いました。



次回展覧会のお知らせ

上原コレクション名品選2

2020年1月18日(土)～4月12日(日)

※1月14日～1月17日は全館休館

上原コレクション名品選では、収蔵品の一つを詳しくご紹介し、その魅力に迫ります。次回展では新収蔵となるアルベール・マルケ《ルーアンのセーヌ川》など、当館が所蔵する近代絵画や仏教美術をご覧いただけます。



アルベール・マルケ《ルーアンのセーヌ川》1912年
※新収蔵・初公開

伊豆だより



海水浴のお客さまや、勇壮な太鼓橋が組み上がる下田八幡神社例大祭(下田太鼓祭り)で夏の賑やかさが感じられた伊豆ですが、9月も過ぎるとだんだんと秋の気配が漂ってきました。

山々に囲まれた伊豆は、天城山周辺で紅葉を楽しむことが出来ます。温泉地・修善寺では修善寺もみじまつりが11月中旬頃から始まり、もみじ林が美しく彩られます。今秋、当館では伊豆市所蔵の日本画の名品をご紹介します。展覧会「伊豆をめぐる名画一横山大観、安田靉彦を中心に」を開催します。温泉街の風情ある佇まいをみせる修善寺の魅力に惹きつけられた画家たちの作品をぜひご覧ください。(櫻井)

展覧会コラム



没後90年記念 岸田劉生展

2019年8月31日(土)～10月20日(日) 東京ステーションギャラリー

JR東京駅直結の東京ステーションギャラリーでは、岸田劉生(1891-1929)の回顧展が開催されます。細密な描写と愛娘・麗子を描いた画家として知られる劉生は、日本近代絵画史上に輝く天才画家として評価されています。劉生は後期印象派への傾倒にはじまり、晩年の東洋絵画を通じた「新しい道」の探求と、最期まで幅広い画風を展開させていました。本展では重要文化財《道路と土手と塀(切通之写生)》を含む150点を超える作品を全国から集め、劉生の子供や作品のサインから分かる制作年月日に沿って展示することで、作品成立の経緯と画業の変遷を辿ります。当館からは水彩画の《麗子微笑像》を出品し、数ある麗子像たちと見比べて鑑賞することができます。本展は東京会場の後、山口県立美術館、名古屋市美術館に巡回します(当館作品は東京会場のみ展示)。(齊藤)



ゴッホがみつめた「ミレー」

2019年9月25日(水)～12月8日(日) 山梨県立美術館 ミレー館

山梨県立美術館が誇るミレーの傑作《種をまく人》がこの秋、ゴッホ美術館へ貸出されることになりました。それを記念して、山梨県立美術館のミレー館で当館のゴッホ《鎌で刈る人(ミレーによる)》が特別展示されます。27歳で画家を志したゴッホは、はじめ敬愛するミレーの版画を模写しました。その中で唯一残る最初期の鉛筆デッサンが本作です。ゴッホとミレーにとって、農民が働く姿は自然とともに生きる人間の存在そのものでした。本展ではゴッホのデッサンとともに《落穂ひろい、夏》など、ミレーの油彩画や版画が展示されます。ゴッホとミレーの作品が並ぶことで、二人の芸術の魅力がより深く味わえる展覧会です。(土森)

次回休館日は2019年10月7日(月)～10月11日(金)、11月25日(月)・26日(火)です(展示替えのため)